

情報概念と情報リテラシーについて

小林仁

鎌倉女子大学短期大学部

1 はじめに

「情報リテラシー」習得にあたっては多くのリテラシー習得が必要不可欠であること、情報処理教育が扱うべき対象は3つ（アナログ情報関係、情報のデジタル化関係、デジタル情報関係）あることを筆者は示した（小林2005）。

現状において、情報リテラシー概念からの情報観は、既出の情報概念との間に大きな隔たりが存在する。本論は、情報処理教育における情報リテラシー概念を一考する目的から、既に表明されている情報概念を分析しその全体像を把握するとともに広義の情報科学への理解を深め、情報処理教育における情報リテラシー概念がどのように位置付けられるのか、並びに情報リテラシー概念の新たな展開に向けて比較検討する。

2 もう一つの情報科学

筆者が検討してきた情報処理教育における情報リテラシー概念からの情報観は、「情報科学」の造語者である高橋秀俊氏を含む工学系研究領域を包含するものの、大きく逸脱する情報概念が多々ある。その後の調べで、逸脱する情報概念の背景にはもう一つの「情報科学」系統が存在していた。

高橋氏自身もその著書において述べている、もう一つの「情報科学」造語者とされる北川敏男氏を中心とする研究成果がもう一つの情報科学系統である。コンピュータサイエンスに依拠した情報科学（以下工学系情報科学）に対して、北川氏の情報科学系統（以下社会科学系情報科学）は、サイバネティクスに触発された社会科学系や人文科学系の研究集団が集い、1966年には叢書『情報科学講座』（共立出版）を刊行し、同年に日本学術会議情報科学小委員会設置（1960年から設置検討）を果たし、文部省（当時）に提言（前田1980）している、とのことである。

これとは別に、情報に関する概念を早い時期に表明し、その後も概念の深化を著した梅棹忠夫氏がいる。「情報産業」の造語者として知られる梅棹氏は、1963年に『情報産業論』（梅棹1963）を著し、その中で、人同士が交わすコミュニケーションの一切を情報と定義した。併せ

て表明されたそのほかの概念は数多く、マッハルプ1962（日本への紹介は1969年、日本名『知識産業論』）、ベル1973（日本名『脱工業化社会』）、トフラー1980（日本名『第三の波』）で表明されている概念と重複することが指摘されている（梅棹1999）。『情報産業論』は『放送朝日』に掲載後、『中央公論』にも転載され、その後何度も他誌に再掲されるなど、社会に対するその反響は大きかったと思われる。

3 社会科学系情報科学の情報観

人文科学系も社会科学系も人及び社会を研究対象としているためか、人以外へ研究対象を拡げる内発力は極めて弱い。そのためか、情報の価値判断は常に人に限定され、社会における組織体が為す価値判断もまた人に帰結させて展望する傾向が強い。

前記したサイバネティクスは、人間だけにあると思っていたフィードバック機能が動物も含めた自然界にもあると示した。まるで知性ある生き物、自動的な仕組みの存在を現実感を持って示したことが、人だけの観点の考え方に大きな衝撃を与えたのであろう。

このような基盤の上に成り立つ情報観は、次のような枠組みを主にもたらす。

第1に、人の知的活動の結果、情報が存在する。このことは知的活動レベルの閾値という観点から、進化過程のどこから情報が発生するかという初出概念を生み出す一方で、脳内での働きの内、どこまでを知的活動とするかという観点を生み出す。

第2に、人の知的活動の結果、社会が存在する。このことは人が作る社会のみ対象となり、所属する社会の捉え方という観点が生ずる。また、組織体や制度等の仕組みをどう捉えるかという観点がさらに加わる。

第3に、有益なもののみを情報とする。この



図1 梅棹氏の情報観

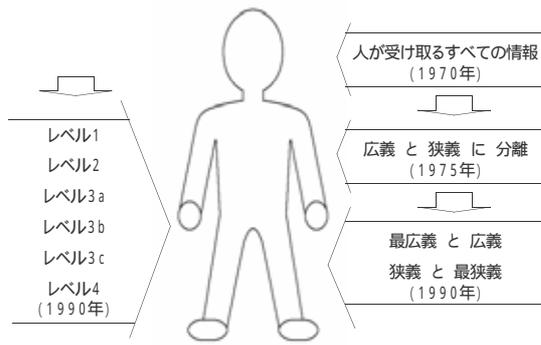


図2 情報概念の分離経緯

ことは有益レベルの閾値という観点から、情報範囲の特定法の多様化と情報範囲内の分類の多様化、及び範囲外の扱いと分類の多様化を生じさせる。

梅棹氏の情報に関する概念は、当初コミュニケーションの一切としたが、その後これを2つ（有意味情報と無意味情報）に分け、さらにコミュニケーション以外の情報も加えている（図1）。また、北川氏の情報科学系統においても同様の拡がりをみせており、さらに1つの情報概念から2分類へ、あるいは4分類、6分類へと拡がりをみせている（図2）。

4 領域拡大がもたらすもの

社会科学系情報科学における情報概念の拡大は、人だけ主義から人中核主義へと移行し研究対象を広げてきたことを示している。また、筆者が示した情報リテラシー概念の拡大、それに伴う情報処理教育内容の拡がりもまた工学系情報科学領域が拡大してきていることを示している。これは図3のように表すことができ、重複する部分は今後さらに拡大していくものと考えている。情報社会における光と影問題や情報倫理などは社会問題の一つとの側面が強く、まさにこの重複部分に該当する。そのほかには、再構成されたアナログ世界関係やプレゼンテーション関係も少なくとも該当すると考えている。

両領域においてはそれぞれ概念の系統化や深化の努力が図られてきている。前述した事項が既に重複しているとする考え方が妥当であるな

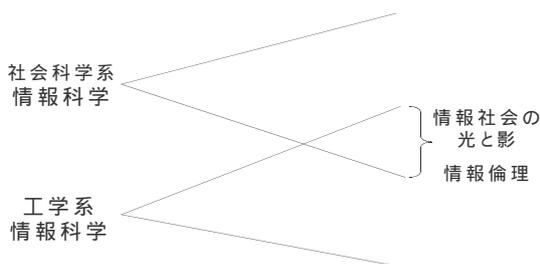


図3 領域拡大経緯

ら、一層の理解を図るためにも社会科学系情報科学観からの検討も行い、教授することが望ましい。

筆者は、各領域を横断的に包含し論ずることができるものとして情報概念があると考えている。また、それに依拠した情報リテラシーもまた同様であると考えている。上記の両領域においても同様と考えられ、社会科学系情報科学における知見が情報リテラシーに加えられていくものと推察する。

一方で、社会科学系情報科学においてもまた工学系情報科学観からの検討を行い、一層の理解を図ることが望ましいが、前述の重複に該当すると列挙した4項目については、具体的な記載が社会科学系情報科学において今のところ確認できていない。

以上のことから、社会科学系情報科学は人の周囲に存在する情報に関心を払っている。その中の一つのラインとして工学系情報科学が扱っている情報がある、と位置付けるざるを得ない。また、社会科学系は情報の価値や意味について積極的に吟味しようとしているが、工学系はどうも媒体レベルの検討に留まっている。よくよく考えてみれば、媒体を代理変数にして情報を論じている工学系と、言語等も含めた媒体の中身にまで立ち入って情報を論じようとしている社会科学系、という構図を意識してしまう。

5 おわりに

社会科学系情報科学の存在は、小林2006で述べた領域向き情報科学の一つの事例として位置付けられる。その社会科学系情報科学領域は、研究成果であろうか、情報を冠した学会が多く見受けられるようになり、分化発展していく様相を示している。しかし、その主要な論点は情報社会の有り様であり、情報の価値論であり、文明論的観点が大きいと理解されることから、それぞれ独立した研究領域に進展していくのかどうか一考を要する。

参考文献

- (1)梅棹忠夫(1963):「情報産業論」, 『中央公論』3月号, pp.46-58, 中央公論社, 1963.3.1
- (2)梅棹忠夫(1999):『情報の文明学』, 中央公論新社, 1999.4.18
- (7)小林仁(2005):情報リテラシーを踏まえた情報処理教育の検討, 情報処理学会第67回全国大会, pp.383-384(第4分冊), 2005年3月
- (8)小林仁(2006):情報処理教育の基礎概念について, 情報処理学会第68回全国大会, pp.373-374(第4分冊), 2006年3月

(他 省略)